

ぶどう晩腐病防除の有効薬剤

1 試験のねらい

昭和57年から本県の露地栽培のキャンベル・アーリーは、夏季の長雨等の影響で晩腐病が多発したため一部のほ場では収穫皆無になるなど激甚な被害を受けた。晩腐病対策はかさかけ等の耕種的対策、加えて、休眠期からの体系的な薬剤防除が必要であるので、防除対策を確立するため休眠期及び生育期に使用する有効薬剤を検討した。

2 試験方法

昭和59～60年に農試場内の露地栽培のキャンベル・アーリーを使用して試験を実施した。試験区は1区25～50㎡、3連制とし、休眠期防除試験は4月中旬に種枝に対して肩掛噴霧機でていねいに散布又ははけで塗付した。なお、生育期の薬剤散布は慣行とし、かさかけを併用した。

生育期防除試験は重要感染時期である6月に7日おき4日、動力噴霧機で10a当たり200ℓ散布を実施し、その他の薬剤散布は慣行とした。

防除効果調査は収穫直前(8月中旬)に試験区内の全果房を調査し、発病程度別に4段階(1果房の発病果粒数1～3、4～10、11～20及び21以上)に分けて記録した。

3 結果及び考察

休眠期防除薬剤ではネオアソジン液剤(50倍液)及びトップジンMペーストの効果が高く、次いでバイレトン水和剤、アビトン50水和剤が有効であった。なお、モンセレン水和剤、ベフラン液剤、トモテクト水和剤及びネオアソジン液剤(200倍液)は効果が劣った(表-1)。

生育期防除薬剤ではダイホルタン水和剤が効果安定しており、ネオアソジン液剤も効果が高かった。なお、アリエッティ-C水和剤は効果不安定であり、バイレトン水和剤・ビスダイセン水和剤・ベンレート水和剤は効果やや劣り、モンセレン水和剤・サニバー水和剤は効果が劣った(表-2)。

以上の結果から、農薬安全使用基準を考慮すると休眠期の防除薬剤はネオアソジン液剤50倍液、生育期の防除薬剤はダイホルタン水和剤、ネオアソジン液剤1,000倍液等を使用すると有効であると考えられた。なお、晩腐病は薬剤防除のみでは防除効果不十分であり、必ずかさかけ・枝かけ等の対策と組合せて実施する必要がある。

4 成績の要約

ぶどう晩腐病防除薬剤として有効なのは、休眠期散布としてネオアソジン液剤50倍液、生育期散布としてダイホルタン水和剤やネオアソジン液剤1,000倍液などであった。

(担当者 病理昆虫部・大兼善三郎・手塚紳浩)

表-1 休眠期の薬剤による防除効果

薬 剤 名	昭和59年度		昭和60年度	
	発病率%	発 病 度	発病率%	発 病 度
ネオアソジン液剤 50倍液	12.8	3.6	1.1	0.3
ネオアソジン液剤 200倍液	17.9	5.4	3.6	0.9
バイレトン水和剤 200倍液	11.3	3.0	2.8	0.7
ベフラン液剤 350倍液	14.8	4.4	1.9	0.9
トップジンMペースト 3倍液	13.2	3.3	1.7	0.4
トモチクト水和剤 250倍液	16.0	4.5	4.2	1.0
モンセレン水和剤 200倍液	19.2	5.4	—	—
アビトン50水和剤 200倍液	—	—	2.9	0.7

注) 発病度 = $\frac{4a + 3b + 2c + d}{4N}$

a: 発病果数2以上の果房数

b: " 1~2 "

c: " 4~10 "

d: " 1~3 "

N: 調査果房数

表-2 生育期の薬剤による防除効果

薬 剤 名	昭和59年		昭和60年	
	発病率%	発 病 度	発病率%	発 病 度
ダイホルタン水和剤 1,000倍液	51.7	16.7	26.2	7.6
バイレトン水和剤 1,000倍液	49.2	17.0	39.9	15.5
モンセレン水和剤 1,000倍液	65.0	23.8	—	—
アリエッティ-C水和剤 1,000倍液	31.5	9.5	49.6	14.5
ネオアソジン水和剤 1,000倍液	31.0	9.1	—	—
ビスダイセン水和剤 1,000倍液	—	—	35.7	11.3
ベンレート水和剤 2,000倍液	—	—	37.8	11.6
サニパー水和剤 800倍液	—	—	51.9	18.6